



新式

連歌新式增抄

下

伊地知文庫  
文庫20  
127  
2



運哥新式抄下

伊地知氏書冊

可隔三句物

月日星

如此 稿素たしとるうほし星一以  
光物 朽ろて七夕う銀浜う二の内

一ありてしつれつまる天の光物  
のさあははほほさうらかり

女 女 女

雪

如此 雪うとみそれハもちり雪裏  
後物 志事記をうさちとちたり

うきうに風お句志事記  
よぬお句風二句ちり

虎 雪 雪 烟

如く  
後身物

小よるよ中よる鳥よ獣



麻根る半ちとくは  
二句たりきく物とつひてい生  
新よあれも二句たりうら  
こつやとたなく半じて生

名はとくあふ 三句 七夕よ月日 依お

三句たりて海年のとくち  
三句光物よりとくと月日

可隔み句物

同字目と日風ら風

われい吹るれ風のふくめ句  
ちららちと

多あり 但隔七 烟と煙 水と山と

山 墨等林舞たよの山 浦と浦 ちちちの道

波と波水とち道とち水と

秋 秋分の及長うれあ句たり

本ら本 ちちちち 草 あ句

鳥ら鳥 ちちちち 秋と秋 ちちちち

虫ら虫 ちちちち 恋と恋

懐ら懐らあらるる水 居る居る

居る居ると書

夕時分のつれもあつて

入目付りてくわいなり 迷懐と迷

懐 祿述此は詞事しうしうしう 老生死しては不

可為迷懐世親子苔衣墨深隠家控身委

身合しん親たり九虫為迷懐之意不露顯詞若迷

懐より自來心、生ハ不為迷懐や墨深衣可也天教

由を年有を沙汰云 懐ら墨深也仁中子衣服也

衣や又墨深抄墨深若衣具同致不於如新式今

案可用 懐らうう背合たりとれもうれ迷懐や

之也 じりうくも依句迷懐に。ちるる

おわらうしうしう身といふ白髪よらうしうしう

おほくもううふねえんすうしうの居る家のうしう

しうしう迷懐のしうしう系ありてもこしうかれ迷懐ますうしう

迷懐のしうしう系ありてもこしうかれ迷懐ますうしう

不為心ぬひのまをうしう極意とてわりたりふとに

わしうしうしう極意とてわれいふしうと恋は戀なり

仁中子又伽の子子の半うしうえんうれうれとあま

裳山と山乃うしう

浦

るる袖と袖

衣書衣書

衣書衣書

神祇と神祇

衣書衣書

ら浦乃名江

浦の名江

系

おりのまじり  
ホを抱りり

て可備 松原の藤原やしとむ之他所より  
又句 巴新びりこりりこりりこりり  
今時分るは

夕月日

月日は各極し他所の日夕の月日  
その既もありと云 夕附日と云

夕月日やうひの影のまはつたれ月と日  
夕のいふかきそ二色ま月たり松一たそとの深  
終く其の夕日  
夕月夕り

### 可備七句物

同季

同季たよ同  
季あり七句

月と月

七句他年月日  
月日ありとの既

ハ又句 あり 松らね 七句松じしの際  
たふ句たり 七句松のふい七句たり

竹 七句竹たり 田ら田 七句新字  
七句たり 田ら田 七句新字

うとといも 三句たり 家ら母ら母ら

洞舟ら船舟字

天懸舟天川舟可備  
七句不可馬多島み器

山舟舟の舟舟字よ 五盤舟の舟舟字  
あつ可備し 二舞舟の舟舟字  
つしたりひふあふの舟舟字  
いふらりそれとつらてあつしたる舟舟字

糸のうらたもはしてはくつー人いーのさる。カレ  
とまりてとひすううぬといふひーん毛無さ針が  
八つうぬいさひものほ子の毛無さ針とらみひ  
て後とひすううぬいさひものほ子の毛無さ針とらみひ  
なり

### 衣字

衣類衣川衣子杜衣字よみ  
衣類衣川衣子杜衣字よみ

可憐 衣類衣川よ二句衣裳尾花の袖をくし  
衣類衣川よ二句衣裳尾花の袖をくし

### 松字

松浦松浦山 松浦山  
松浦山 松浦山

### 田字

生田田上 田上  
田上 田上

### 竹字

竹田竹 竹田竹  
竹田竹 竹田竹

唯舟墨衣川よ 唯舟墨衣川よ  
細代河 細代河

### 芦乃植綿

秋紙

### 可分別物

#### 花の波

花の波 花の波  
花の波 花の波

#### 花の波

花の波 花の波  
花の波 花の波

#### 松風のぬ

松風のぬ 松風のぬ  
松風のぬ 松風のぬ

#### ぬ

ぬ ぬ  
ぬ ぬ

#### 月の雪

月の雪 月の雪  
月の雪 月の雪

下

五

油も月に入らざりて子にあらざれば...  
ハチもあつぬゆへにわたり月しく言ひてたりあをたり

月乃油 同 夜の洞へていふありの油は...  
あつぬゆへにわたり月しく言ひてたりあをたり

櫛戸 うら物よあつぬゆへにわたり月しく言ひてたりあをたり  
あつぬゆへにわたり月しく言ひてたりあをたり

櫛の戸は櫛板の戸は...  
あつぬゆへにわたり月しく言ひてたりあをたり

木乃葉衣 如此類は...  
あつぬゆへにわたり月しく言ひてたりあをたり

花の雪 うら物よ可燻之...  
あつぬゆへにわたり月しく言ひてたりあをたり

正計なり雪に...  
あつぬゆへにわたり月しく言ひてたりあをたり

波の花 あつぬゆへにわたり月しく言ひてたりあをたり  
あつぬゆへにわたり月しく言ひてたりあをたり

波の雪 あつぬゆへにわたり月しく言ひてたりあをたり  
あつぬゆへにわたり月しく言ひてたりあをたり

所用如此両方よ可混合之物...  
あつぬゆへにわたり月しく言ひてたりあをたり

嫌之不可混合よハ不嫌之を...  
あつぬゆへにわたり月しく言ひてたりあをたり

油乃雪 あつぬゆへにわたり月しく言ひてたりあをたり  
あつぬゆへにわたり月しく言ひてたりあをたり

洞乃雪 あつぬゆへにわたり月しく言ひてたりあをたり  
あつぬゆへにわたり月しく言ひてたりあをたり

あつぬゆへにわたり月しく言ひてたりあをたり...  
あつぬゆへにわたり月しく言ひてたりあをたり

羅波志加

此の意  
代准之

那の名にやん

わたり 社者

わたり 社者 あり 先 戸 蓮 薦 厨

あつた 伽法

あつた 伽法 然 榎 水 室

あり

手洗水

あつた

あつた 手洗水

祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ

祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ

祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ

祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ

祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ

祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ

祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ

祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ

祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ

祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ 祈願おとせ



わしうり酒の案  
 ろり作るし  
 之多力対ぬさて  
 可憐し  
 結のりよちまうこのまふれわく  
 ちうこのぬいりもぬいさるゆ  
 けうのちま  
 けり物ま三句こ

くろ色に祈用之事

船令波とて浦と付て大水塩

かよとすしうりうりよと若戸あつ鳥の記橋

いすへー為各別物しあや

想してゆらわのうれぬ浦海川たし  
 ぶいりうれ祈ちりまはちし  
 物ちりまはちまあぬと祈おれとも  
 用祈お祈用おとぬば三句のちま  
 居の祈用もねちうし  
 せぬ祈用のお物ちうもつ  
 下し祈用の三句す  
 可な味ちう上神皇  
 他ちう色代准之  
 不遠ちりわし  
 たしり山形いのち日あわらわ

カ州の名をいおぼの川の浦よみ二箇の浦よみ

海之 十海の園法を人の 岩橋 くら人の岩橋

新丸木 母よ二句を 焼はねわら

嶽流川 山上に 流川十れ

字流川 北山に九川より流る 三つに

泊瀬 唯在山開山類 只この山にあり

清見寺 唯在浦之南 非水 太子建

系乃流 唯小野吉野奥 可道山歌

可大 然岩山 可力山に神也

可大 然岩山 然岩山 然岩山

可大 然岩山 然岩山 然岩山

可大 然岩山 然岩山 然岩山

仙人 人偏ん杜木成者の 岩橋 人偏ん杜木

仙人 人偏ん杜木成者の 岩橋 人偏ん杜木

仙人 人偏ん杜木成者の 岩橋 人偏ん杜木

仙人 人偏ん杜木成者の 岩橋 人偏ん杜木

すまやねすまやねなりや海よ  
香山 不可方  
山形

山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり

山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり

富士浅る島城 山形神用

山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり

山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり

山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり

山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり

山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり

山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり

山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり

山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり

山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり

山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり  
山形はもとてふたにゆかりなり







武王の大家は海に不味すは初りて律令を  
さしゆんを徳の防のしは後のせりるを後にかく  
おそりて官もわり又さふりて職作りさしこれと  
合和の者すさ戸はや他内古中納言の大家よ  
りひふあももささちかれども古徳合よのせられ  
とささゆんをゆへさ中かすしりて京を除用  
こいあにわさ徳司とせしめりて  
ささふこれいあ中の人よあさささ  
あさ徳ん

一 須乃乃花 為上巳日 可為春也

三尾のくはの己の川原に十海をそあさりて  
味あしりす徳あさりても上巳の日さささわり

心乃心花 心花なり 柳柳は心乃 白色鳥鷲尾 鳥鷲の

鳥鷲 鳥鷲 二ちりてれさしむかりきさすはたは  
とねはさりてわり又さささるあさりるさのささ  
アさあささささささささささささささささ

志加夫乃山越 志加夫乃山越 今のヶ道よ  
さささささささささささささささささ

神奈神元 神奈神元 ささささささささささささ

社乃牡丹 社乃牡丹 ちんさささ

毛さうりあふなまき 并ちあふなまき 以上

平野家 多し 上申日延暦は此神社と建五  
ありて貞観より此家れと

いりてはてはちなるるあふなまき内侍はしを  
此の口よりしりて貞観をとりてうらよまのりて  
養和と條時のまのりてあふなまきと人つひとに  
いしと條時の人つひとにひりり此聲あふ  
賀茂條時のまのりていしとに條時のまのりり  
寛和元年四月十日よりいしとにあふなまきの  
つひとに條時持助前系惟成たり定くしりて  
一のあふなまき廿二年氏廿三の階氏廿四の  
ち氏廿五の階の神社よりいしとにまのりり  
九月申の日にいしとにあり四月はよたわ

常 都らよしひい 此のいしとにまのりり  
三月をとりていしとにまのりり

船 なるなりいしとにあふなまき  
いしとにあふなまき

なるなりいしとにあふなまき  
いしとにあふなまき

清水 難くじとにまのりり  
なるなり川よりいしとに

目映 難くじとにまのりり  
なるなり川よりいしとに

編書 可なり なるなり川よりいしとに  
なるなり川よりいしとに

樹桐 初秋より なるなり川よりいしとに  
なるなり川よりいしとに

なるなり川よりいしとに  
なるなり川よりいしとに





又廿九日よ播磨とてお撲とてすらのりて流うんぞ  
あつちり秋糸三年よしつて流て徳園にらり  
のりぞりあつ寛平七年よ日本記よ密に天皇七  
年七月よ高麻のしげよ勇士のり名と當麻蹶  
速とつふちつてつた半角よもつた川下天  
守とつあつてをささつて流てつてつてつて  
人と群長よあつてつてつてつてつてつて  
れのつありあつ見の宿禰とつりれつてつてつて  
とつら秋とつりつてつてつてつてつてつて  
宿禰とつりつてつてつてつてつてつてつて  
うらつてつてつてつてつてつてつてつて  
とつてつてつてつてつてつてつてつて

放生

秋紙 あ  
あ

星月夜

川くさあよ  
可憐めつこ

秋吉衣

七りの 後獲よよみ入るもちり七り  
奥ちり のりよあ事もつれつてつて

半ちり七りの秋吉衣つてつてつてつてつて  
秋吉衣つてつてつてつてつてつてつて  
じろの山凡とつりつてつてつてつてつて  
七りの奥よもつてつてつてつてつてつて  
庭よもつてつてつてつてつてつてつて  
よ向よ三年のうらつてつてつてつてつて  
腹中のあつてつてつてつてつてつてつて  
つてつてつてつてつてつてつてつてつて  
あつてつてつてつてつてつてつてつて  
とつてつてつてつてつてつてつてつて  
うらつてつてつてつてつてつてつてつて  
れつてつてつてつてつてつてつてつて

鴨草

桂也 きされ  
あつてつて



節別は宗養として百韻は言わぬありきとて  
下月節はうらみとしてあそびとていふは  
わきまの用とけり味も用とていふは  
房はうらみとていふは男の用とていふは  
冷 係不可為秋し由雖有一夏秋の 涼気は夏  
季の大切し時強用之有例 ありきとて

清か納ま梳きまよすさきさき物老女のきりひ  
次しをきぬすしひのむしてあつたの暮月  
わきまありきとていふは男の用とていふは

秋をきぬすしひ

已上 秋をきぬすしひ

あはれ雪

初雪の雪 かわらぬ雪

庭火

非あめもの枯庭はたかくたりたり  
とていふは庭火の用とていふは

初庭く燎のまわり

小乃葉衣の葉あは

あはれ物をきぬすしひ

紅葉のりりて枯れも  
さうの地のうらのま

あはれかきとていふは庭火の用とていふは  
字じすしては秋はあつたかり

水糸

かきぬの庭の 先あるは秋糸の用と  
りし中あり高日の儀武

あはれ庭の庭のしる清水はたかりし秋の用と  
使年人返府はうらみ還るの用とていふは  
あはれ庭の庭のしる清水はたかりし秋の用と  
のまより出さるまひのるのとていふは

二つは度々一々しては舞人づつうらら...  
 東乃結糸のふ作人信境を流の地...  
 出たわりのてろつ地...  
 うの下よな...  
 いちりて...  
 そのこまう...  
 さに...  
 けり...  
 さ...  
 あ...  
 けり...  
 さ...  
 あ...  
 けり...  
 さ...  
 あ...

豊的草會

此 是の七年の編  
 此 と...



多海もつらむをくわらわしきまふまふのさかたのふ  
いそがしけいりたきりくわらわしきかきさしきさ  
いあつて一洋流等志ま  
旭山

鳴鈴鳴入

同音 二たう 葉入 入射 かりり

和縁

以上和縁也 みるりきりしりしてし先

塩屋

居みよ二句 文居古家と出

里神示

二句可塩ら 西とてふ

ちとあまの  
三教 ちりり  
まにまの肉葉のわよわらうらうらと云ふ

都水階

百の位のたけのり

とりたつて百ていりあて  
まふとつりあたり

雪の上

九字

已上也 居みよ 九とてぬのうらわらとてうらわらとて  
旭山

九とてぬのうらわらとてうらわらとて  
旭山

はふとてぬのうらわらとてうらわらとて  
旭山

ふらうぬのうらわらとてうらわらとて  
旭山

自終あつてる着のわとてうらわらとて  
旭山

神祇のまふとてうらわらとて  
旭山

三つりり可塩と  
旭山

まきくちやく **家** いしん 家人 かなたに 家

**松門** 松のまはりに たる門に 松の松窓

**菅笠** 菅 笠 菅笠 菅笠

**本流** ニカ 流 本流 本流

**元本** 元本 元本 元本

**催了** 催了 催了 催了

**紫衣** 紫衣 紫衣 紫衣

**神** 神 神 神

**極** 極 極 極

**少** 少 少 少

**又** 又 又 又

**不** 不 不 不

**志** 志 志 志

**若** 若 若 若

**田** 田 田 田

**二** 二 二 二



露竹文

わくわく心の上  
旭極物

竹も旭極物  
心の上の心なり

藤松

新ありて地へ来乃松心

福延

福のけりちとあつた  
いづれとけりか

言けり

うけとけり

名延字乃松

名

なかりりか  
いづれとけり

名延字乃松

心極物

名延

なかりりか  
いづれとけり

名延字乃松

火

ひ

延松

ひ

又松

火の字とあつた  
心極物

延松

又松

火の字とあつた  
心極物

延松

又松

火の字とあつた  
心極物

延松

又松

乃月

乃

乃月

乃の字とあつた  
心極物

乃月

乃の字とあつた  
心極物

乃月

乃の字とあつた  
心極物

乃月



粟のひしとちと  
ワカシヤのひし

節

石帯をくいて  
くは地さらくたし

冠當

衣類

衣

此名類を  
但可種

衣をきくうの家  
衣をきくうの家  
衣をきくうの家  
衣をきくうの家  
衣をきくうの家

平林乃句は  
平林乃句は  
平林乃句は  
平林乃句は  
平林乃句は

又平林の句

不可付之

此の句は  
此の句は

つふ句は  
つふ句は  
つふ句は  
つふ句は  
つふ句は

不可付之

此の句は  
此の句は

つふ句は  
つふ句は  
つふ句は  
つふ句は  
つふ句は

つふ句は  
つふ句は  
つふ句は  
つふ句は  
つふ句は

つふ句は  
つふ句は  
つふ句は  
つふ句は  
つふ句は





名子付て 山々 春帯之橋朝とて 可力其を ありありに鑑とて 橋二の 橋人 ありて 地は二を

橋田 可為 植物 ありて 田は二を ありて 田は二を

のりねちしとて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

なほじ 春 ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

時花 詞乃花 ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

わらじ ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて



ゆるいぬえの糸の終へ衣帯  
のちうて可考杖や可考

頭也眉也

糸 糸の物 白糸の半く  
速懐く

糸の字

文て 糸の時 糸の字 糸の字 糸の字

ぬ ぬの字 ぬの字 ぬの字

つ つかの字 つかの字 つかの字

い いらの字 いらの字 いらの字

お におの字 におの字 におの字

山 山の字 山の字 山の字

老 老の字 老の字 老の字

若 若の字 若の字 若の字

糸 糸の字 糸の字 糸の字

何 何の字 何の字 何の字

糸 糸の字 糸の字 糸の字

糸 糸の字 糸の字 糸の字





魚

魚のうろこ

舟

海路は舟の核

舟の舟は舟の舟

さう川の光

月よりのそく

煙之然者可為林

二句

鞠

乃庭

庭の心

庭の心は

圃乃名と玉の名

三句

山城

の形

圃乃名と名

可姪

圃乃油

名

名神

名神

名神

名神

名神

名神

名神

名神

名神

名神

圃

圃

圃

白敷之陣

春秋

此の句は... 之の句は... 二句は...

鳥散 遠懐

懐旧云常 在此内

友名之族神域

山形

神用事

畧 畧 洞

又名...

尾

同 葉

神と名は... 秋と名は...

谷

月名...

山

山

神

海

又あり

已上如此...

海

溪

又あり

渚

鳥

又あり

于泻うり岩江いわえ  
又あり  
名あり

沼ぬま河池泉がわいせん  
又あり  
名あり

波水なみ水塩水室みづしおみ  
已上

多おほくりりわわししわわししりりててももああるる魚いし

用もちわわりり浮う木き舟ふね流なが  
は

物ものととししてて塩しお焼やく塩しお屋やああるる鳥とり類るい

子こ鳥とり杜と若わ葛くわ蒲ぼ草そう道みち美み産うぶ

海うみ杞き和わ布ふ  
名あり

草くさ平ひら海うみ人ひと関せき伽が法ぽう

魚いし網あみ釣つり虫むし手て洗せん水すい魚いし類るい

下した樋ひ  
名あり

産うぶ里さと窓まど門かど店みせ戸かど櫃こ魚いし産うぶ壁かべ

隣となり垣かき  
名あり

室むろ戸かど文ふみ庭にわ外そと面めん

用すれども 人我身友父母能

開告 カキガキ 開告に田紙を折る開告たしめ

主 糖 媒 カキガキ 口舌の事

わらみ ワラミ とひて

も人備や月とあらし 苑と主

そうの ソウノ 山形本ま ヤマノ

苑のあり エンノ 月にな ツキニ

人倫 月氣をとりあらしむる

信の神人倫 シノノ

連物知字抄

後宗恩寺殿本抄一系  
古也

従古以賦物為題或百韻或又  
百韻每句用其賦物を代發句  
計有賦物之沙汰服句以下一  
句不危之仍謹以云不詮解不  
忘四及而已及句よは危賦物之時  
二よ海<sup>あ</sup>と<sup>い</sup>の<sup>な</sup>之<sup>い</sup>れ<sup>ん</sup>令<sup>ん</sup>山<sup>の</sup>極<sup>と</sup>

よあ<sup>あ</sup>の<sup>あ</sup>句よは<sup>あ</sup>人<sup>の</sup>字<sup>の</sup>可<sup>あ</sup>危<sup>の</sup>  
人の山よも海<sup>の</sup>右<sup>の</sup>なり自餘唯之  
又三よ海<sup>の</sup>賦<sup>の</sup>物<sup>の</sup>あ<sup>の</sup>一字<sup>の</sup>露<sup>の</sup>顯<sup>の</sup>賦<sup>の</sup>  
物<sup>の</sup>近代も百韻連<sup>の</sup>あ<sup>の</sup>よ每句<sup>の</sup>忠  
成<sup>の</sup>之<sup>の</sup>危<sup>の</sup>有<sup>の</sup>其<sup>の</sup>具<sup>の</sup>二字<sup>の</sup>返<sup>の</sup>音<sup>の</sup>以下<sup>の</sup>賦<sup>の</sup>  
物<sup>の</sup>と<sup>の</sup>子<sup>の</sup>句<sup>の</sup>と<sup>の</sup>あ<sup>の</sup>句<sup>の</sup>と<sup>の</sup>あ<sup>の</sup>句<sup>の</sup>と<sup>の</sup>あ<sup>の</sup>句<sup>の</sup>  
常<sup>の</sup>危<sup>の</sup>之<sup>の</sup>賦<sup>の</sup>物<sup>の</sup>之<sup>の</sup>字<sup>の</sup>上<sup>の</sup>十<sup>の</sup>百<sup>の</sup>

韻之中亦犯之中以此而い句は  
忌之近代無之沙法頗可理也  
心仍近年者至中月之句賦物之字  
斟酌云

各句韻句同字 并物名をい句  
八句の中准海句句於可嫌之

近代一々懐長川返之句二句迄

懇述遠名不未如女面不似之

右方死也也之

右大概唯建治式作之但當  
世好古不用耳及不及取捨只為  
い當座之諱論粗不意如件

應安五年十二月日

後善光園攝政殿  
御判

新式今案奥書

石應安新式云々送之

各後大各體云々此の由てやん又相云々

永不可遠背他未定年近日

論之題自未或云々新券又

訪宗砌法所意見粗取記云

以并派脱象及知産津流

自化加新所流月云々送

乞好也

享徳元年十一月日

後常恩寺殿

開向御前



和漢篇

このまじりあはし

大概法不用連歌式目等

うし合

大略同

和漢者以五句為限從至漢對句

可及六句等

是まの海へしてまめりたてて  
いつきまぬい漢の音字のうらま

對句のまて六句すりまてたり

系物まよ末

負收和漢可通用、此位也

昔古の境先宋之、和漢冬可

用之

昔古老雨前曉たてと漢に、まめ常用  
和まよまの、まよ用たり、較せん

同季可海七句同字、并恋

述懐亦可海六句

同是方、うし、ま、  
わたり、ま、

自余隔七句之物可海六句

月、月

月と月とまめさくられ、あ、

隔五句之物可

隔三句

山、山、山、水、水、水、  
り、り、り、り、り、り、

F

甲

陽之句物可陽之句端打紙

物同連歌式目 さしとれと二万たりわさ  
時かろの時かゝ如き文の

心新より色之居ふ亦不可有之神用

分別半 但今大妻おしはてあつわ漢神用  
之は法もやさうありてこの神半と

ちり 万物異名物半神可定之季

但可為本神半 漢是名を半神よよ  
正回きわす

船令金馬、月新神の御令

學の馬衣の意、新踏の意、藤

如之 万依連歌異名物之例

此のよよ本神又異名と二五五のよよありてちり  
漢よよ本神とす人ことありてちり

藤句中可定其本字未字之半

暖字 五花  
之意 知 日 激氣 陽也し半り  
只其の半り

あつわのち 痕 燒也し  
半 踏 わらひ  
ら

あつわのち 足 あつわのち  
万んわらふら ちり 足 あつわのち

新緑 若葉の 暮 人斗

早の わりの 早 早の

花字 清和 四月廿五日 初涼 四月の天

冷爽 冷爽の 爽 爽の

令氣 本宮土令 苦 苦の

枯 拾枝の 臘 十二月の

標梅 梅の 信 信の

客 客の 宿 宿の

客 客の 宿 宿の

宿 宿の 宿 宿の

宿 宿の 宿 宿の

宿 宿の 宿 宿の

宿 宿の 宿 宿の

宿 宿の 宿 宿の

下

四三

私語

世に私語をいふは

人々

一の為人の言は

可信半 只姓をうり人の偏をわくすは種別といひ姓を

名利を

世に意名利をうり人の偏をいふは

浮世

わくすは出たる事之浮世

出入

如は私語 出入の言

わくすは出たる事之浮世

縁

約束の言可

禪定

定の座禪や信人の座禪の事しるは定

湯

如は私語の言は

幽下

迷懐や不士といふ

もはかりの言は

應安以来新式之今案追加条々  
并を代用控乃篇目亦依多々其  
端末字子常途之商豊而令彼是  
勅以為一冊但猶末一丈之事或  
皆漏之或先載之以待後定也

同者流之亦正乎

文龜辛酉林清上澣

澣わくわく  
じ二月

之かひとぬをり繁とあつらうらなり上旬中  
旬下旬のうと流たり流の字もくわくわく

一勅 ゆめとひるめよむのくまをくするのくわくこれ  
むかひりくわくうらむむかひり一はま子大子

のくまをたり大子のくまを結の字もくわく  
とくわく油ぬゆり岸あやまたりを

出処 ゆめくわくわくむかひり  
りんまよたり **ク長問** まよくまを  
くわくわたり

寛文五年八月日

萬屋作右衛門

